



序

長崎大学学長
齋藤 寛

長崎大学は、「伝統的文化を継承し、豊かな心を育み、地球の平和を支える科学を創造すること」を理念とし、地域と国際社会の発展に貢献しています。特に、アジアにおける役割を果たし、世界トップレベルになるべく更なる高度化と個性化を図り、世界の知の情報発信拠点であることを目指して努力しています。その根底に流れる出島南蛮西洋文化の華やかさの陰とは裏腹に、唯一の原爆被災医科大学をその前身とする悲しい歴史が厳然と存在します。昭和20年8月9日、たった一発の原子爆弾で潰滅しましたが、戦後の復興と共に、多くの先人らの努力により、原爆医療や医学研究が着実に展開されてきた稀有な特徴を有しています。この蓄積された知識と経験が、1986年4月26日未明に起きた史上最悪のチェルノブイリ原発事故後の医療協力や海外における放射線の健康影響調査研究に多大の貢献をしています。

平成14年度、世界最高水準の研究拠点づくりをめざして文部科学省が優れた研究テーマを採択する21世紀COEプログラムが競争的資金獲得の中で始まりました。最初の一つに採択された長崎大学21世紀COEプログラム『放射線医療科学国際コンソ - シアム』は、万全の教育研究体制で大学一丸となり事業の推進に当たってきました。その結果、高い中間評価を受けましたが、平成19年3月で5年間の国際コンソ - シアム形成事業が終了します。今回の本事業成果報告では、朝長万左男拠点リ - ダ - の研究総括から、重要な代表的研究課題についての成果が報告されています。特に、旧ソ連の核汚染地域を中心とした放射線被ばく医療・疫学コンソ - シアムと、欧米の先端科学研究拠点との放射線生命科学コンソ - シアムの2つを両輪として、順調に放射線医療科学分野の国際的な教育研究事業が推進されたことは、各報告内容や研究業績をご覧頂ければ明らかです。当初目標として掲げた「放射線生命科学」の基礎研究の推進と、「国際ヒバクシャ医療ネットワーク - クシステム」の構築、そして「放射線被ばく者医療研究」の3プロジェクトは、世界のトップレベルの海外拠点18機関との学術交流協定の締結を基に推進されました。大学全体における波及効果も大きく、平成15年度には『熱帯病・新興感染症の地球規模制御戦略拠点』が二つ目の長崎大学COEプログラムに採択され、平成17年度からは、これらの研究活動の国際展開と国際的人材の育成を目指して新たに国際連携研究戦略本部が設立されました。同時に、国連専門機関との連携も強化され、現職教授を2年間世界保健機関WHOへ放射線専門科学官として派遣し多大の成果を挙げました。一方国内では放射線影響研究に関する広島大学や関連研究機関とも連携が深まり、緊急被ばく医療を含む新たな放射線被ばく医療が展開されています。平成19年度には、健康環境危機管理研究センター - 構想も実現する予定であり、現代のリスク社会における包括的な教育研究の取り組みが始まります。

以上の成果に加えて、唯一の原爆被災医科大学の使命と責務を国際社会において果たす為にも、この5年間で構築された海外教育研究拠点との連携を強め、新たなグローバルCOEプログラムへの挑戦が不可欠です。アジアにおける原発建造ラッシュや核テロの脅威、さらに顕性化する医療被ばくや放射線平和利用の安全確保問題などに備える社会的な役割を担う「被ばく医療学」を創生する必要があります。長崎大学は、今後とも放射線の光と影に焦点をあて、特に放射線の生涯にわたる人体影響を科学的に究明し、21世紀の核の時代における新たなリスク評価・管理、そして何よりもリスクコミュニケーションに関する地球規模の教育研究戦略拠点を目指す覚悟です。